

司式 熊田雄二牧師  
奏楽 門脇陽子姉妹

前 奏

開 会 招 詞

\* 賛 美 歌 1:1 われら主をたたえまし

われら主をたたえまし きよき御名あがめばや 来る日ごとほめ歌わん  
神にまし王にます 主のみいつたぐいなし アーメン

\* 開 会 祈 禱

罪 の 告 白 祈禱書2 罪の告白①

神よ、わたしを憐れんでください。御慈しみをもって。深い御憐れみをもって、背きの罪をぬぐい  
去ってください。わたしの咎をことごとく洗い、罪から清めてください。わたしは咎のうちに産み落と  
され、母がわたしを身ごもったときも、わたしは罪のうちにあったのです。わたしを洗ってください。  
雪よりも白くなるように。神よ、わたしの内に清い心を創造し、新しく確かな霊をさずけてくださ  
い。救いの喜びを再びわたしに味わわせ、自由の霊によって支えてください。主よ、わたしの唇を開い  
てください。この口は、あなたの賛美を歌います。

主イエス・キリストの御名によって。アーメン。 (詩編51)

罪の赦しの宣言

十 戒 祈禱書4

1. あなたは、わたしのほかに、何者をも神としてはならない。
2. あなたは自分のために刻んだ像を造ってはならない。それにひれ伏してはなら  
ない。それに仕えてはならない。
3. あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、  
み名をみだりに唱える者を、罰しないではおかない。
4. 安息日をおぼえて、これを聖とせよ。
5. あなたの父と母を敬え。
6. あなたは殺してはならない。
7. あなたは姦淫してはならない。
8. あなたは盗んではならない。
9. あなたは隣人について偽証してはならない。
10. あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、またすべて隣人  
のものをむさぼってはならない。 (出エジプト20、申命記5)

\* 賛 美 歌 1:2 世は世へと歌い継ぎ

世は世へと歌い継ぎ 喜びと畏れもて 主の奇しきわざを告げ

慈しみ知れる者 御栄えをほめたたう アーメン

共同の祈禱 祈禱書12 降誕節 第五主日 主の洗礼

愛する神さま、わたしたちの主イエスが、ヨルダン川で洗礼を受けられたとき、聖霊が鳩のよう  
に降り、天よりの御声が、主イエスを神の子であると宣言しました。

貧しい人々に福音をもたらし、捕われた人々に解放を宣言し、見えない人の目を開き、苦しめ  
られていた人を自由にするために、主はキリストとして油注がれました。

わたしたちは洗礼によってキリストに結ばれ、主の働きにあずかるために召されたことを覚え  
て、心から御名を賛美します。(マタイ3、イザヤ35、ローマ6)

献 金 (黒) 教会活動 (赤) 沖縄伝道を覚えて(那覇伝道所) 70

今献ぐるそなえものを 主よ 清めて受けたまえ アーメン

聖書朗読 ルカによる福音書12章13~34節(新約聖書131頁)

説教・祈禱 「思い悩むな」 熊田雄二牧師

\* 賛美歌 103:1 日々主は共にいまし

日々主は共にいまし 悩みに勝つ力 全ての重荷を負い 慰め助けたもう

愛に満てる御神は恵みを日々与え 悩み苦しむ時も憐れいと安きたもう

アーメン

\* 主の祈り 祈禱書1

天にましますわれらの父よ

願わくは御名をあがめさせたまえ

御国を来たらせたまえ 御心の天になるごとく 地にもなさせたまえ

我らの日用の糧を 今日も与えたまえ

我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく 我らの罪をも赦したまえ

我らを試みに会わせず 悪より救い出したまえ

国と力と栄えとは 限りなく汝のものなればなり アーメン。

\* 頌 栄 63 あめつちこぞりて

あめつちこぞりて かしこみ讃えよ み恵みあふるる父・御子・御霊を アーメン

\* 祝 禱

後 奏 (黙禱)

報 告 門脇献一長老(司会・受付 次週:古澤純一長老)

本日 受付 1階:長尾牧・那珂信之執事 2階:星野房子執事 / 動画: 録音:

次週 受付 1階:若月学・森永美保執事 2階:加藤良明執事 / 動画: 録音:

※ 2グループ制により、長老も1階と2階に一名ずつ加わります

## I 序

12章1節で、「とかくするうちに」とあるので、すぐ前のファリサイ派や律法学者たちとの激しい論争から続いている話であることが分かります。「とかくするうちに、数えきれないほどの群衆が集まって」来たのですが、イエス様は、まず弟子たちに「ファリサイ派のパン種に注意なさい」とお話をなさいました。きょうは群衆の一人がイエス様に突拍子もない要求をしたことからお話をなされた場面です。「愚かな金持ちのたとえ」はルカ福音書だけにある話ですが、「思い悩むな」というところはマタイ福音書の山上の説教にある話とほぼ同じ内容です。

## II 「愚かな金持ちのたとえ」

この話をルカはどこから手に入れたのでしょうか。「多くの人が福音書を書いているけれども、私は詳しく調べて順序正しく書く」と執筆方針を述べてから福音書を書き始めています。すでにあつた福音書で参考にしたのは「マルコ福音書」ですが、マルコ福音書には、このたとえ話はありませんし、マタイ福音書の山上の説教のような説教集もありませんし、その内容となるような話もほとんどありません。

では、どこから手に入れたのか、誰から聞いたのか、一つ考えられるのは、新約学者が想定してきた「イエス語録」です。現在、出版されて日本語でも読める「イエス語録」は『トマスによる福音書』ですが、これは年代がルカ福音書より100年以上あとですので、ルカが参考にしたものではありません。しかし、「イエス語録」なるものがあるとすれば、十二使徒の誰かの名前を付けなければならないことは分かります。マタイとヨハネを除くと、あとはペテロ、アンデレ、ヤコブ、トマス、フィリポなどです。そういう名前の付いた福音書が発見された時は、思わず身を乗り出してしまうのですが、新約学の研究では、今のところみなニセモノとされています。

そういう十二使徒の名前を借りたニセ福音書が、もうルカが福音書を書いている頃からあつたのではないかと、ルカ自身の執筆方針からうかがい知ることができます。いっちょモウケタローという不屈きなヤカラがいたことは、十分考えられます。しかし、そういうヤカラも、自分の名前を付けることはできないので十二使徒の名前を借りるということは、情報を得るとしたら、イエス様と行動を共にした十二弟子以外にないことがはっきりします。そしてルカは、十二使徒が存命中に福音書を書いているので、直接取材できます。同じ時期に福音書を書いているマタイから聞くこともできたでしょう。

このたとえ話、マタイは載せなかったけれども、ルカは載せたということも考えられます。それは執筆方針の違いから十分考えられます。マタイはあちこちでイエス様がお話をなされたことを山上の説教で一まとめにしました。ルカは、あちこちでお話をなされた順番で記録しました。マタイのおかげで、山上の説教だけを取り上げて説教する人は、かなりい

ます。ルカのおかげで、「思い煩うな」という説教には「たとえ話」が付いていたことを味わうことができます。

この「愚かな金持ち」のたとえ話は、「人の命は財産によってどうすることもできない」という当たり前の事実を分かりやすく教えています。また、遺産相続をめぐる醜い争いが起こりやすいことは、今も昔もおなじだなあと思わされますので、これはイエス様当時のユダヤ人の話だと片付けるわけにはいかないことも教えられます。

### Ⅲ 思い悩むな

この世のはかない富を追い求めないで、天に宝を積み。神と富と両方を主人にすることはできない。地上に宝を積もうとする生き方になると、地上の生き方を思い煩うようになる。富をどこに隠そうか、何を食べようか、何を飲もうか、何を着ようかと、自分の富と命のことで思い煩う。明日をも知れぬ命のことで思い煩うな。思い煩わないためには、まず神の国を求めよ。この基本的なメッセージは、マタイ福音書と同じです。

しかし、ところどころ、違うところもあります。思い煩わないための第一は、神の創造の恵み、自然に学べということです。24節に「カラスのことを考えてみなさい」とあります。マタイ福音書では「空の鳥」です。カラスと訳されている言葉は、英語では「クラウ」crowかなと思ったら、私が使っているギリシャ語英語並列の聖書では「レイヴン」raven と訳されています。Crowの方が「カー」と鳴く音に近いのに、raven とは何だ？と調べてみると、カラスにも種類がけっこうあるようで、普通のカラスcrowより大きいワタリガラスなんだそうです。

ルカは医者ですから、生きものと命に関しては普通の人より詳しいでしょう。ところが、24節には「鳥」という字が三つあって、始めの二つは「からす」とふりがながふってあって、三番目は「とり」とふってあります。当然、ギリシャ語が別々の言葉だから、そう訳を工夫しているわけです。コラカス Korakasが「からす」で、何だか発音がカラスに近いですね。ペテイノーン peteinwnが「とり」です。peteinwnは英語では当然、バードの複数形 birds です。

なぜルカは使い分けているのか、分かりませんが、ローマ帝国の高官テオピロ閣下に「初めから詳しく調べて書いてさしあげたい」と言っているのだから、ギリシャ語の文化圏で Korakas を使うことに何か意図があるのかもしれない。ただ、詳しく調べると言っても、実際にイエス様が使われた言葉はヘブライ語に近いアラム語でしょうから、ギリシャ語だけでは限界があります。説教でいちいち「カラス」と言ったり「とり」と言ったりでは、聞いている方は気になるでしょうから、ここはマタイに従ってただ「とり」とします。

さて、ここでイエス様は、鳥が思い煩わない動物であると言おうとしているのではないですね。「蒔かず刈らず倉に納めず」は、食べる事にあくせくしないわけですが、「神は鳥を養ってくださる」という創造者の恵みを強調しておられるのです。

27節の「野原の花」についても同じです。花が思い煩わない植物であると言おうとしているのではないです。「働きもせず紡ぎもしない」は、何を着ようかとあくせくしないわけですが、「神が装ってくださる」という創造の恵みを言おうとしておられます。「栄華

を極めたソロモンでさえ」と分かりやすい比較で教えておられます。ソロモン王の時代は、イスラエルの歴史でいちばん輝かしい時期でした。まばゆい宮殿に踊るきらびやかな王妃たちが、絢爛豪華に咲き誇った花のようでした。

しかし、人間が有らん限りの手を尽くして装うよりも、神が装わせてくださる野の花一輪の方が、調和がとれて美しいのであります。「栄華を極めたソロモンでさえ、この花一つほどにも着飾ってはいなかった」とは、ソロモンの謙遜さを言おうとしているのでなく、ソロモンの栄華は、野の花一つの美しさにも優ることはできなかったという、神の創造の恵みと美しさです。

空の鳥、野の花を見ながら、人間とは何者であるかを見よ。これがメッセージなのですが、25節。「あなたがたのうちのだれが、思い悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか」。これが「愚かな金持ちのたとえ」が示すメッセージです。「わずかでも」はペーキュン peexun 「1キュビトでも」。これは旧約聖書に出てくる長さの単位ですが、「一尺でも」あるいは「1フィートでも」に当たります。ひじから手指までを使って「1キュビト、2キュビト」と測っていくわけですが、人種や民族によってサイズが違うので、30～40センチです。すなわち、長さの単位で長生きをイメージして、あと5年、あと10年と考えても、寿命は神によって決められています。あとわずか1年でも、主が与え主が取りたもう、それが命です。

病気か事故か、事件に巻き込まれるか、戦争に巻き込まれるか、火災か洪水か地震か……。人の命は明日をも知れぬものです。私が明日生きているかどうかは、神のみぞ知りたもうことです。明日は阪神淡路大震災から27年です。あの時から、日本列島に安心な場所はないことを体験し続けています。命が奪われる時は本当に一瞬です。

しかし、それでも人間は、神の創造の最高の作品だと、イエス様は言われます。24節「あなたがたは鳥よりもどれほど価値があることか」。これが仏教と違うところです。生き物の命は皆平等ではないのです。人間には、神のかたち、神の息である魂が吹き込まれています。鳥も花も、全てを人間に託して「地を治めよ」と命じられた神が、地を治めるために、全ての良きものを与えてくださらないはずがあろうか。だから、思い悩むな。

「思い悩む」という言葉が「心配する」という言葉も含めて、この段落に4回出て来ます。マタイ福音書では6回です。これは「心が分かれ分かれになる」という意味の言葉です。メリムネオ Merimnaoo ← meris(part)+mnaomai(be mindfull)。何に心が分かれ分かれになるかという、心配事全部に分かれ分かれになります。食べる事、飲む事、着る事、病気、事故、事件、地球温暖化、火事、洪水、地震、戦争、仕事、商売繁盛、受験合格……。心がバラバラに分裂します。そして分裂した数だけ神々を心の中に持ち込んでしまいます。つまり、一つの心を多くの神々に分散してしまうから思い煩ってしまうのだと、イエス様は指摘しておられます。

飲み食いが不要なのではありません。唯一の神である「天の父はご存知」です。私たちに必要なことを。しかし、「体は衣服より大切であり」、「命は食べ物より大切」です。つまり、服を着るのは体のためであり、食べ物をいただくのは命のためです。その体と命が、あすあさつと日が経つにつれてすり減っていくことこそ、罪人が思い煩うべきことです。体と命がなくなることへの思い煩いから解放するために、神は救いをお与えくださ

いました。救い主によって、体と命がなくなることへの思い煩いから解放されることが「何よりもまず必要なこと」です。だから31節「ただ神の国を求めよ」とイエス様は言われます。まず神の国を求めよ。罪に陥った人間に、最も大切なものとして神が与えようとしておられるのは、救いと永遠の命です。すなわち、キリストをまずいただきなさい。そして神の国の働きに参加しなさい。これが御心です。そうすれば、その働きのために必要なものは「加えて与えられる」のです。

32節の「小さな群れよ、恐れるな」は、ルカだけにあるイエス様の言葉の記録です。異邦人伝道の使徒パウロのお供をしたルカは、小さな群れを勇気づける必要を感じたことでしょう。私たちも、異邦人の小さな群れです。